

ボロブドゥールに環流思想を見る

染谷 臣道

世界最大の仏教寺院ボロブドゥールは、訪問者を圧倒するその
壮大さゆえに、現代インドネシア人の誇りとなっている。ナショ
ナル・アイデンティティの基礎に置かれたとしても不思議ではな
い。例えば、Candi Borobudur merupakan salah satu
contoh tingginya peradaban Indonesia di masa lalu (ボロブ
ドゥール寺院は昔のインドネシアに高い文明があったことの一例
です) という語りがある。この文例は私の友人であるジャカルタ
のある大学教員が送ってくれたもので、これに接したとき、私
は、peradaban を躊躇なく「文明」と訳した。文明という日本
語は、日本人にとって高い価値をもつ（広義の）文化の意味で使
われているが、インドネシアでも同様だと思ったからである。イ

ンドネシア語には budaya (kebudayaan) という、日本語の
「文化」にあたる単語があるが、それとは区別された peradaban
は「高い文化」あるいは「進んだ文化」の意味合いがもたされて
いるようだ。日本語の「文明」と同じである。なお、ここで（広
義の）文化といているのは文化人類学という文化である。それ
は人類が自ら造り出し、それによって環境に働き掛ける装置（道
具）に他ならない。それは狭義の文化と区別される。狭義の文化
とは「文化人」、「文化の日」、「文化的生活」、「文化勲章」など
「高度な」生活様式を意味する。それゆえ、狭義の「文化」と
「文明」はほとんど同義といってもよいかもしれない。日本語の
「文化」と「文明」の意味があいまいなのはこのあたりに原因が

あるのだろう。なお、「文化」と「文明」に関する、その異同も含めた最近の私の論考については、二〇〇七a、二〇〇七b、二〇一〇a、二〇一〇b、二〇一〇一a、二〇一〇一二を参照されたい。いち早く「文明開化」つまり「近代化」を進めた日本では明治以来、文明を「高い（広義の）文化」あるいは「進んだ（広義の）文化」という意味で使ってきた。

文明は、いうまでもなく、五〇〇〇年前のメソポタミアに始まる画期的な文化（広義）であった。すなわちそれ以前の文化（広義）つまり「未開」文化とは異質の文化（広義）であった。「未開文化」と文明の最も大きな違いは平等社会であったか、それとも格差社会であったかの違いにある。文明は格差社会を構築したから支配階層は政治活動を行うために王宮を築き、そこに住んだ。一般庶民は周辺の（王宮に比べれば）みすばらしい民家に住み、あるいは都城の外に住んだ。ボロブドゥールを建築したシャイレンドラ王国も例外ではない。確かに、シャイレンドラ王国の都城がどこにあったのか、その大きさや形態なども含めてまだ判らないから確言はできないが、当時の先進的叡知を結集し、巧みな技法をもった有能な彫刻師を集めることができたからには、また、壮大な建築を何十年も掛けて造ったからには、相当な資力を保有していた強力な王国であったことは疑いない。¹⁾ボロブドゥー

ルのレリーフは上段のジャータカなどの物語の絵もさることながら、「隠された基壇」の実に写実的で表情豊かな浮き彫りを見て感じるのには彫刻師の高い技術である。それは「素晴らしい」の一語に尽きる。上段のレリーフは仏教説話を描いたもので、インド直輸入という感じがしないでもないが、それに対して「隠された基壇」で描かれているのは当時のジャワの庶民の姿であり、それは第一級の民族誌的資料であるといって過言ではない。中には今のジャワ人と変わらない様子の絵もある。彫刻師の技量は驚くほど高く、彼らを雇うためには相当な経費を要しただろう。

文明はそのきらびやかさ、豪勢さが人々の目を引くからそのオモテが目立ち、私たちに賛美の気持ちを起こさせても不思議ではない。しかし文明が格差社会を内包しているのであれば、当然ながら、ウラあるいは影もある。それも見なければ文明を見たことにならないと考えるのである。「先進国」である欧米にせよ、現代日本にせよ、その繁栄のウラを見ないで賛美するのは一面的理解でしかない。植民地帝国である欧米の繁栄のうらにはアジア、アフリカ、中南米、オセアニアの犠牲があった。後発の日本もかつては近隣諸国を植民地化し、収奪した結果の繁栄だった。インドネシアに限って言えば、そのオモテはオランダだった。オランダによる凄まじい収奪がインドネシアを疲弊させ、今日に至るも

その後遺症が残っているのである。文明を理解するうえでこのような理解は欠かせないはずである。

文明はそもそも西洋が自らの文化（広義）を自画自賛するために造り出した固有名詞であった。だが後に似たような高度な文化（広義）を指す普通名詞に拡大された。ここでいう「高度な」というのは、文明と対置された「未開」の文化（広義）や「野蛮」な文化（広義）と比較した形容詞だが、文化相対主義の観点から見れば、こうした比較は文明の側からの文明中心主義的偏見ではない。文明が必ずしも「高度な文化（広義）」と見なせないのは、今日、世界を覆っている文明（近代文明）の悪弊を見れば、一目瞭然であろう。確かに、文明、とりわけ近代文明は人類に多くの利点をもたらした。しかし同時に悪弊ももたしている。原爆をはじめとした大量殺戮兵器にせよ、その「平和利用」である原発にせよ、これらは悪弊以外の何ものでもない。大気汚染やストレス社会など悪弊は数えればきりが無い。

本稿の目的は、ポロブドゥールのいわゆる「隠された基壇」に描かれた一六〇枚のレリーフをもとに、上段を含めた全体が何を語ろうとしたのか、を論じることである。一二〇〇年前に建立されたポロブドゥールは何のために造られたのか、についてはこれまでさまざまな議論されてきた。しかし「隠された基壇」につい

ては、この寺院が建立されている途中で分厚い石壁で覆われてしまい、見ることができなくなってしまったためもあって多く語られることはなかった。石壁で覆われたのは崩れ始めたからだ。特に北面から東面に掛けて未完成のレリーフが多いのがその証拠となる³⁾。筆者が手にする写真集 *Rahasia di Kaki Borobudur The Hidden Foot of Borobudur* は一六〇枚すべてのレリーフの写真が収められている貴重な資料だが、簡単な解説があるだけである。

「隠された基壇」には何が描かれているのか

「隠された基壇」はこの寺院の最下段にある。したがって設計者はこの基壇で来場者に向かってまずあることを告げようとした。それは何だろうか。一六〇枚のレリーフを丹念に見ていけばそれが読みとれるだろう。

「隠された基壇」は「人生の流れ」(karmavibhanga) を描いたものといわれてきた。「人生の流れ」とは、いわゆる「善因果・悪因果」のことである。確かに、天界や地獄の絵が描かれ、たぐさんの「施し」の絵が描かれ、悪行とされる行為の絵が描かれているからそのような理解は間違いではない。なお、「隠された基壇」の詳細についてはすでに論考を発表しているのでそ

ちらを参照していただきたい(染谷:二〇一a)。本稿はその論文を執筆した後に新たに考えたところを記述したものである。

善果としての天界?

「隠された基壇」が善因善果・悪因悪果を描いたものだとすれば、天界の絵が善果だと考えてよいのかもしれない。後に見るように、天界の絵にしても、天界と似たような現実世界の絵にしても善果を表現しているかのように思われるからである。だが、大乘仏教の教えに従えば、善果は涅槃の世界であったはずである。あたかも善果のように描かれている「隠された基壇」で描かれた天界やそれに似た絵をどう解釈するか、その解釈は筆者の力量を越える。この問題について本稿では一つの疑問として提示しておくだけにとどめておこう。

西面の最も北寄りから北面に掛けての五枚、そして東面の北寄りにある六枚の絵は、全体に穏やかな表情でゆったりと座り、豪華な衣服と装身具を身にまとい、複数の女性に囲まれていて善果であるかのように見える。それらの中で天界の絵だと判るのは、絵の上に *svarga* という刻字が施されていることが一つ、他に天界を象徴する聖樹 *kalpataru* と人頭の聖鳥 *kinara-kinari* (雄と雌) が描かれているからである。*svarga* は今日のジャワ

語の *svarga* (インドネシア語では *surga*) にあたる。なお、レリーフの上に刻字があるのは限られており、一六〇枚すべてにあるわけではない。刻字は、*virupa* (悪い顔)、『*abhidya* (面白くない)』、『*ghosti* (丁寧に話す)』、『*cakravarti* (世界の支配者)』、『*bhogi* (地主)』、『*pataka* (旗) など』⁽⁴⁾までであるが、レリーフが完成したときにこれらは消すつもりだったのだろう。しかし何らかの理由で消し忘れたと思われる。消し忘れたのは基壇が崩壊し始めたからと考えられる。天界を描いた絵は一四枚を数える。

天界とあまり変わらない、裕福な人が複数の女性に囲まれている絵の中には *cakravarti* (世界の支配者) や *bhogi* (地主)、『*adhyabhogi* (裕福な地主)』、『*svasti* (聖人の家族)』、『*viyadharmanakavachita*』、『*svasti* (聖人たち)』、『*mahecakhyasamavadhana*』、『*svasti* (権力者集団)』、『*mahojaskasamavadhana*』などの刻字があるものもある。天界の絵と支配者や聖人や地主の絵が北面から東面の北寄りにほぼかたまっているのを見ると、両者が同一のカテゴリに分類されているようだ。ただ、天界は架空の世界であり、「世界の支配者」や「地主」などが現実世界だとすれば(ただし「世界の支配者」が現実世界の支配者を意味していると解釈した場合だが)、既に触れたように、前者は現実世界で積んだ善因の結果であり、後者は現実世界に居ながらにして善果を得たことになる。人生はすべ

て苦であるとする仏教の教えに従えば、後者もまた楽ではないはずで、全体に穏やかで裕福で楽を印象づけるのは奇異である。

否、天界ですら、源信によれば、楽土ではなく苦の世界なのだから穏やかで裕福そうに描いた理由はよく判らない。源信は天界中の天界である忉利天について「その楽しみは極まりないほどですが」（源信…一二四）としつつも、「最後には去ってゆかねばならない、という苦しみは残る」といつている（源信…一二五）。また「無色界の最高天（忉利天を指していると思われる（著者注））にいる天人だって、阿鼻地獄に落ちることもなる」（源信…一二五）といっているから、天界でも悪因をつくるわけで、現実世界と変わらないことになる。このように架空の世界も現実世界と変わらないというのはどう理解してよいのだろうか。確かに、天界といえども六道の一つだから現実世界と変わらないとしても不思議ではない。現実世界と架空世界を同一視する背景には「迷いの世界」から完全に離脱（解脱）し、涅槃の世界に誘う意図があったと考えられる。しかしポロブドゥールの「隠された基壇」に描かれた天界の絵にしても裕福な人たちの絵にしても源信が描く天界とは非常に異なる印象を受けるのである。ポロブドゥールの設計者たちが抱いていた天界やこの世の幸福は、源信の天界や裕福な人々の生活とは別だった可能性がある。もちろんそれを証明す

る資料はない。

天界が現実世界で積んだ善因の結果つまり善果だとするならば、貧しくとも善行を積む人たちが赴く世界として描かれてよいはずだが、そのような善因善果を物語る絵はない。上段のジャータカなどのレリーフで語るところに任せているのかもしれない。

悪行の絵

「隠された基壇」のレリーフをどのような順番で見たらよいかについては、ストーリーがある上段と違って一六〇枚にはストーリーがないためにはつきりしないが、上段と同じように東面が正面で、南側に移動し、西側から北側に回るといふ回り方であるとするならば、東面の中央から南側に向かって進むことになるだろう。そうすると最初に目に入るのは右側半分に獲った魚を入れた魚籠を前に座る漁師が描かれ、左側では何か束ねたものを天秤棒で担ぐ男の姿が描かれている絵である。Rakasiaでは市場の様子と説明されているのだが、魚を獲ることが不殺生の罪とされているようだから、この絵も悪行の絵と見てよいだろう。この絵の左横には弓を持った男が描かれ、その左側で魚をさばいている男と壺を火に掛け、火吹き竹で火を吹いている男の絵が描かれている。解説では「動物を殺した罪で死罪を受ける」とあるが、地獄

の絵はむしろ西面に集中しているからここでは悪行の絵とだけ解釈したほうがよいのではないかと思われる。その左の絵は三人の女性が墮胎している絵らしい。解説では「辱めを受けた女性が墮胎している」とある。辱めを受けたからといって、どのような根拠に基づいてそう判断しているのかは示されていない。その左の絵は二人の獄吏が罪人の首に首枷をはめて刀を振り回している。その左側の絵は、中央で刀や槍を手にもち、踊っている。

その右側では彼らに抗議するような手つきをしている男たちが描かれている。また、左隅で命を落としたか落としそうになっている子供を抱きかかえている男とそれを心配そうに見守っている三人の男女が描かれている。

一〇番目は、右側に二人の男が通行中と思われる人を襲い、金を巻き上げようとしているかのような絵が描かれている。一三番目は中央の台のうえで横になっている男が描かれ、その左右で何人かの男たちが話し合っている。その表情からすると悪だくみを話しているかのような印象を受ける。解説では「怠け者と悪人の絵」とある。一八番目は、その右側では一人の男がたくさんの人たちに介抱されている。台の下に壺などが描かれているから金持ちなのだろう。左側では何人かの男女が話し合っている。看病の仕方などについてであろうか。その左側の絵も看病される男の

絵である。患者の頭をマッサージする者、腹や胸をさする者、薬をもってくる者など細かい。これら二枚の絵では男たちが座る台の下に壺があると見ると、酒の飲み過ぎで病気になったという伊東の解釈も可能だろう（伊東一九九二：二二八）。南東角にあるこの二枚は例外的に現在でも見ることができている。

地獄の絵

一連のレリーフが地獄の絵だと判断できるのは、仏教が描く地獄の描写を表していると考えられるからである。日本に伝わる地獄像を参照するのがよいだろう。日本では、さまざまな地獄像が語られてきたが、とりわけ源信（九四二—一〇一七）の『往生要集』が多大な影響を与えてきた。彼は「人間世界を含めた迷いの世界には本當の心の平和がないので、そこから何とか離れるべき」（源信：三九）と前置きし、それら迷いの世界を七つに分けて説明した。七つの世界（道）とは、地獄（道）、餓鬼（道）、畜生（道）、阿修羅（道）、人間（道）、天上（道）（天界）であり、そのうちの地獄は等活地獄、黒繩地獄、衆合地獄、叫喚地獄、大叫喚地獄、焦熱地獄、大焦熱地獄、無間地獄（阿鼻地獄）の八つがあるという（源信：三九）。一般には八熱地獄（八大地獄）と呼ばれている。日本には八寒地獄も紹介されているが、「隠された基

壇」にはない。熱帯のジャワの現実にはそぐわないから当然といえる。

源信の地獄の説明は凄まじい。その様態もさることながら、規模（広さ）はとてつもなく大きく、時間も天文学的数字が並ぶ。

貴族であれ、平民であれ、批判精神がなく、素直に聞く人には相当の迫力をもって迫っていたはずである。合理主義者であり、科学を「信仰」している現代人とは相当の距離がある。その点では、後で触れるが、現代の篤信のインドネシア人には近いといえるかもしれない。地獄の様態についてここでは岩波仏教辞典に従っておこう。なお、石田瑞麿も地獄を簡単かつ明瞭に説明し（石田・五八―七五）、さらに日本の史書、物語、説話などで取り上げられた、地獄に落ちた人の話しを紹介している（石田・九五―）が、それらを読むと、いかに日本では地獄思想が人々を捉えていたことが判る。たとえば菅原道真を大宰府に左遷したために彼の「怨心」で地獄に落ちたという醍醐天皇の説話があるが、それは権力者についてよく語られる墮獄の一つだろう。紫式部が墮獄したのは『源氏物語』のような絵空事を書くことは妄語の罪を犯す」（石田・一二〇）からだという。妄語（うそ、虚言）が罪であるというのは仏教が諫める十悪の一つではある。しかし『源氏物語』が妄語と断罪されるならば、他の小説家にしても同じで、小

説家で墮獄を免れる人はいないことになる。もつとも、墮獄を免れたとしても、人間はいずれも苦に満ちた餓鬼道、畜生道、阿修羅道、人間道、天上道（天界）に行くわけだから刑に服するといふ点で変わりはないが。

等活地獄とは「殺生の罪を犯した者が落ちる地獄とされ、獄卒に責めさいなまれて死んでも、涼風が吹くや生き返り、あるいは空中に声があつて生き返り、再び同じ責苦を受けることを繰り返す」（中村他監修・六〇四）とある。八熱地獄で最初に挙げられる地獄である。黒縄地獄は二番目で「鉄の黒縄で身体を巻かれ、それに沿って切り刻まれる」（中村他監修・六六二）地獄であり、三番目の衆合地獄は「鉄の白に投げ込まれて鉄の杵で打ち砕かれる」（中村他監修・六六二）地獄であり、四番目の叫喚地獄は、「湯の煮えたぎる大釜に投げ込まれたり、猛火を出す鉄壁の部屋に追いつまされたり、あるいは口をこじ開けられて溶けた銅を流し込まれるなどして叫声を発する」（中村他監修・一七二、六六一）地獄で、五番目の大叫喚地獄は「（叫喚地獄と）同種の責苦によりなお一層の苦しみを受ける」（中村編・六六一）地獄である。六番目の焦熱地獄は「焼いた鉄棒で串刺しにされたり、鉄鍋の上で猛火にあぶられたり」（中村他監修・四四二）する地獄で、「殺生・盗み・邪淫・妄語・飲酒などの罪を犯したものが落ちる」（中村他監

修：四四二」とされる。七番目の大焦熱地獄は（焦熱地獄より）「さらに一層の猛火・炎熱の苦しみを受ける」（中村他監修：六六一）。そして最後の無間地獄（阿鼻地獄）は「間断のない極限の苦しみに身をさいなまれる」地獄で、（母殺し、父殺し、聖者殺し、仏身殺し、教団を破壊するなどの）五逆を犯した者、仏教の教えを誹謗する者が落ちるとされる（中村他監修：一一）最も重い地獄である。

日本に伝わった地獄を参考にすると、八六番目の絵は中央部で二人の男が掴み合って争っていてそのうえで鳥がそれを睨んでいるかのような絵であり、等活地獄（sanjiwa）に当たるといえる。絵でははっきりしないが Milkic によれば男たちは鉄の爪を、そして鳥は鉄のくちばしをもって争っているとしよう（Milkic: 66）。「この地獄に落ちた罪人たちは、常に相手に対して互いに敵意をもっていて、もし出会ったりすると、鉄の爪で互いに傷つけ合う」（源信：四三―四四）という源信の説明に合う。左側では動物を木の枝に吊るし、刃物でその首を切っている男と、左側では地べたに座り込んだ男に刃物で威嚇している男たちの姿が描かれている。Rudiらによれば sanjiwa（等活地獄）と kalasutra（黒繩地獄）だという（Rudi: 184）。殺生の罪を犯した者が落ちる地獄は等活地獄に限らないから Rudiらが sanjiwa と断定する根拠は

ははっきりしない。また、鳥は衆合地獄の「鉄の炎のくちばしを持った鷲」（源信：五五）に符合しそうである。刃物で威嚇している絵は強奪の罪を説いているのだろう。

また、八七番目のレリーフは、右側に象に踏みつけられそうになっている男、中央部では岩の間に首を挟まれている男、ネズミと思われる動物を手にした男、犬に追いかけられている男、そして左側には棒で殴られている男が描かれている。Rudiらによれば sanghata（衆合地獄）と raurava（叫喚地獄）だという（Rudi: 185）。衆合地獄は源信によれば、「たくさんの鉄の山が向かい合ってそびえ立ち、牛の頭や馬の頭をもった鬼どもが、手に責め具を持って罪人を山の間に追い込みます。すると両側から山が押し迫ってきて、その間に罪人をつぶしてしまふ……また、石の上に罪人をのせて、上から大きな岩でつぶします」（源信：五五）といっているが、この後半の記述に一致する。小動物を手にしている男は殺生の罪、また犬に追いかけられている姿は等活地獄の第六の小地獄に出てくる野犬（源信：四六）などに符合する。八八番目には舌を棒で押しえつけられている男、女性に手を上げている男、犬に脛を噛みつけられている男などが描かれている。Rudiらによれば maharaurava（大叫喚地獄）と tapana（焦熱地獄）だという。舌を棒で押しえつけられているのは妄語の罪

を犯した人間、女性に手を上げているのは他人を苦しめた者が落ちる等活地獄の小地獄に該当する。犬に脛を噛みつかれている姿も衆合地獄の第六小地獄と同じだろう。

八九番目のレリーフは右側で二人の女性が魚や亀を煮ている。中央部では釜茹でにされている人間、左側では男に刀で切りつけられそうになっている女性、そして左端では地面に投げつけられている男が描かれている。魚や亀を煮ている女性が左側で殺される罰を受け、釜茹でや地面に投げつけられる罰もあるということだろう。Rudiらによれば、pratapana（大焦熱地獄）と avidi（無間地獄、阿鼻地獄）の絵だという（Rudi: 185）。殺生の罪は大焦熱地獄や無間地獄に限らず、等活地獄の小地獄、叫喚地獄もあるから Rudiらの断定には問題があるう。

九〇番目は右側には女性に抱きつく男と、何かを吸っている男が描かれている。解説ではアヘンを吸った男と説明されている。『往生要集』にはアヘンを吸うという罪についての言及はない。多分、源信の時代にはこうした麻薬の常習犯はなかったのかもしれない。その代わり飲酒の罪は何度も出てくる。中央部では三人の人間が波の模様があるものの中で片足を上げて叫び声を上げているかのような絵が描かれている。その姿を見る限り叫喚地獄ないし大叫喚地獄の絵と思われる。

九一番目は、右側で三人の男が何かを話している様子が描かれ、中央部では立木に腕を絡ませている男が三人の男に引きはがされそうになっている絵、吹き矢を吹く男、石の上に置いたもの（多分小動物だろう）を叩く男などが描かれている。解説では「妄語を言った者や動物を狩る者は地獄で苦しめられる」（Rudi: 186）とある。妄語を言った者とは右側の三人の男たちのことをいっているのだろうが、彼らが妄語を言っているのかどうかはもちろん判らない。そのあたりは解説者が自由に解説したことだろう（ただし「隠された基壇」が人々の目に触れることはなかったからそうした解説も説かれることはなかった）。吹き矢を吹く男や小動物（と思われるもの）を叩く男が殺生の罪を犯していることは明らかである。

九二番目は右端に木の下でうたた寝をしている男の前にいる女性に言い寄っている男、その左側では立木につかまっている男が槍をもった男と吠える犬に脅され、左側では釜で茹でられ、刀で切られそうになっている男たちが描かれている。解説では「刀をもって殺す者、夫が寝ている間に姦通する女、ともに地獄で苦しみを受ける」（Rudi: 186）とある。魚を獲る者が釜茹での刑に処せられているのであろう。

姦通を犯した者が落ちる地獄は、源信によれば、衆合地獄、叫

喚地獄、大叫喚地獄、焦熱地獄、大焦熱地獄など多様である。姦通を含め一般に日本では罪を犯す者として男が想定されているかのような印象を受けるが、ポロブドゥールの基壇を見る限り、女性もまた罪人と見なされているかのようである。罪に性差はないのだから当然かと思われるが、日本の描写に偏りがあるのはなぜだろうか。

一〇九番目は魚を獲る者、大きな魚を天秤棒に掛けて運ぶ二人の男、そして左端では釜茹でにされている人間が七人ほど描かれている。これも殺生の罪を戒める絵に間違いはない。

一一〇番目は右端で二人の男を威嚇する男が描かれ、左端では釜から逃げ出そうとしている男たちが描かれている。人を威し盗む罪が叫喚地獄や焦熱地獄に落ちることを描いているのである。中央部では一人の男が高台に座って四、五人に向かって教えるを説いているかのような絵が描かれ、左右両端の絵とは対照的である。左右の絵の悪因悪果を説いているのであろう。

このように東面の南側から南面の東側に掛けては罪を犯している絵が連続して描かれているが、合わせると二三枚ほどであり、全体（一六〇枚）のうちの八％に過ぎない。一説では「隠された基壇」は地獄の絵が描かれているといわれてきたが、そうした説が間違いないとい切れないにしても、正確とはいえないのではなか

ろうか。

餓鬼道・阿修羅道・人間道は描かれていない

日本では地獄道の他に「迷いの世界」は餓鬼道、畜生道、阿修羅道、人間道、天道（天界）があるという。合わせて六道という。「隠された基壇」にはそれらが描かれているのであろうか。

源信が描く餓鬼はさまざまなのがあるが、たとえば身長が人間の二倍もあり、顔も目もないという鑊身（源信・九五）、あるいは身長が四キロもあるという食吐という餓鬼（源信・九五）などは「隠された基壇」には描かれていない。髪の毛が長く垂れ下がって身体中にまつわりついているという餓鬼（源信・九六）も描かれていないし、食気（じきけ）、食法（じきほう）、食水（じきすい）などという餓鬼はその姿がどういふものか記述されていないので基壇にあるのかどうか不明である。つぶさに調べれば、あるいは描かれているのかもしれないが、現時点で視認できる餓鬼はいない。

畜生道に生きるものは、海中に住むもののほかに鳥類（禽類）、獸類、虫類があると源信はいう（源信・九八―九九）。これらは「お互いに傷つけ、殺し合い、飲んだり食べたりする場合も、少しも心が休まらず、一日じゅう怖れをいだいており、水の中に住

んでいる畜生は漁師に殺され、陸に住む畜生は狩人に殺され、象・馬・牛・ろば・らくだ・らばなどは鉄の釘で脳天を割られたり、鼻に穴をあけられたり、くつわをつけられたり、重い荷物を背負ってむちで打たれたりし、いつも食べることだけを考えていて、ほかのことは全く判らない」（源信・九九）という。畜生道に闕してボロブドゥールの「隠された基壇」で注目し値するのは二枚だけだが、そのうちの一枚は鳩、孔雀、インコ、馬、水牛、シヤコウ鹿が描かれている絵である。解説によれば、これらの動物は「罪人の生まれ変わり」とある。また別の絵には頭がガルーダやコブラの人物が描かれている。解説では「罪人は死後、ガルーダの頭と五匹のコブラが頭にのる」とある。これらの絵には魚や虫、あるいは犬や猫、鶏などは描かれていないし、げじげじやいたち、あるいは虱や蚤も書き及んでいる源信ほど詳しくはない。もつとも、虱や蚤を石のレリーフに描くのは難しいという問題もある。これら二枚の絵も、解説では、すべて地獄の絵として扱っているかの印象を受ける。したがってジャワに畜生道という観念があったのかどうか、ははっきりしない。

「雷の音を聞くと天の鼓がなったと思つて怖れおののく」（源信・一〇二）という阿修羅の姿は見られない。

「外面はどんなに素晴らしい姿をしていても、内部は山ほど汚

いものを包み込んでいる」（源信・一一一）人間、「生まれた瞬間からずっと苦しみを受け続けている」（源信・一一四―一一五）人間、そして「たとえ長生きしたところで最後には死んでゆく」（源信・一一八）人間を描いた絵もない。描かれているのは悪行を働いている絵や裕福な生活をしている人々の絵、あるいは施しをしている人々の絵などであり、「汚いものを包み込んでいる」人間などをテーマにしたと思われる絵はないと思われる。映像化しにくいということもあるだろうし、このような人間観はむしろボロブドゥールの上層で説明されるべきものと考えられたのであろう。

三施を説く

地獄の絵、天界の絵、あるいは天界に類似した絵よりも多いのが施しの絵である。物品の授受を描いた絵が六一枚あり、説法を描いた絵が四八枚ある。物品であれ、説法であれ、仏教ではともに施しとされる。すなわち三施（法施、財施、無畏施）である。

これらの仏教用語を使えば、財施が六一枚あり、法施が四八枚あることになる。無畏施は財施と法施に含まれていると考えてよいだろう。いずれにせよ、施しを描いた絵が合わせて一〇九枚もあり、一六〇枚のうちの三分の二（六七・五％）もあるわけで、他

を圧倒する。それが意味するのは何だろうか。東面の一番目から続いた、罪行を描いたレリーフは二五番目で終わり、それから説教や施しのレリーフが八五番目まで延々と続く。もともと、そうした説教や施しのレリーフは九七番目から再び続き、説教や施しの多さがひときわ目につく。

「隠された基壇」が「善因善果・悪因悪果」を描いたというのであれば、善因である施しを勧める絵が多いのも当然だろう。しかし施しの絵が多いのは、ポロブドゥールを企図した者たちが意識していたかどうかはともかく、鋭い文明批判を含んでいたのではないかと私は考える。

文明社会は収奪という「原罪」なくしては成立しないことはすでに述べた。文明が起る前の狩猟採集時代、そこには収奪はなかったと考えてよい。狩猟採集時代は自然とともに生きていた小集団社会であり、技術力も低い時代だった。収奪があったとしても軽度の収奪に留まらざるを得なかった。自然からにせよ、社会からにせよ、収奪の程度が低ければ、人々は協力し合わなければ生き残りは難しかった。言い換えれば、基本的に、互恵的なモノの交換、労力の交換、情報の交換は必須だった。文明以前の時代、よくも人類は生き残れたものであると感心する。多大な困難の中で生きていたはずである。

しかし文明という装置を構築して以来、人類はそうした困難から抜け出すことができた。ただし困難から抜け出したのは文明を構築し、その恵みを享受する人々つまり支配者集団に限られていたことはいまでもない。彼らにとっては、文明は利器だったが、彼らに使役された人々にとっては、逆に凶器以外の何もでもない。文明は利益を得る者と収奪される者に人々を分断した。そこに葛藤が生まれて当然で、社会の不安定さは免れなかった。文明は、目を見張る素晴らしい王城や儀礼装置や芸術作品、工芸品等を生み出したことは確かだが、それは民衆を収奪した結果であったことを見落としてはならない。文明には輝かしい光の部分、オモテの面と暗い影の部分、ウラの部分があった。その明暗は文明の発達とともにますます明瞭かつ大規模になった。輝かしい西洋近代文明の影には西洋による非西洋世界の凄まじい植民地収奪があったことはすでに述べた通りである。

収奪の緩和・環流文明の構築

不安定を取り除く方法は収奪の緩和である。それは環流によってのみ可能である。他者に「与えること」はその具体的行為に他ならない。このことがポロブドゥールの「隠された基壇」で強調されたのであった。どこまで意識化されていたかについてはとも

かく、文明批判と同時に文明崩壊を避けるための助言を与えたわけである。

物や言葉の授受は、地球上で展開する環流の一環に過ぎない。考えてみれば、自然であれ、社会であれ、そのすべてが環流という原理で成り立っていた。大気も静止しているわけではない。大気は窒素、酸素、炭素など一七種類の元素から成るが、それらが地球をぐるっと取り囲み、還流しているのである。水も温度と気圧の変化に応じて大気中と海と大地を還流しているのである。そしてマグマも生命の連鎖も血液の循環もすべて還流である。人間もその一環を生きている存在に他ならない。

そうした環流を止め、人間が、正確にいえば、力をもった人間が力づくで奪い取る収奪で文明は成り立ってきた。これは自然の法則に反するのではないか。不自然な行為ではないか。その自然さがさまざまな問題を引き起こしている現代、自然の法則にしたがう環流文明へと変換しなければならぬと考える。それはボロブドゥールが教えているところだと私は考えている。

ボロブドゥールに環流思想を読む

ボロブドゥールは欲界と色界と無色界の三層構造から成る。欲界と色界の「迷いの世界」から涅槃の世界へ離脱することを勧め

るのが大乘仏教の教えだった。ボロブドゥールの最上段にそびえる大ストゥーパを涅槃への入り口だと私は考える。第一回廊から第四回廊の、人の背より高い欄楯と主壁の狭い通路を何巡も経回り、視界が開けた三層の円壇を通ってようやく装飾のない大ストゥーパにたどり着いたときに感じる解放感は、まさに涅槃への入り口に立った時に感じる解放感そのものだろう。大ストゥーパは大乘仏教の最高神である大日如来 (mahāvairocana) である。

しかしそれは最下段の「隠された基壇」に描かれている民衆のなかにもやってくる至高の仏である。仏性はすべての中に生きている。一切衆生悉有仏性である。最上段の仏がすでに最下段にあり、人々を導く。最上段の最高の価値が最下段に具現し、最上段へとつながる。民衆は最下段の「隠された基壇」を見、上段の第一回廊からジャータカ、アヴァターナ、ラリタヴィスタラ、ガンダヴェーハの絵を見、欄楯の上に鎮座する諸仏を仰ぎ、円壇の釈迦像を仰ぎ、大ストゥーパに至ることを勧められる。その行程は下から上のすべてに循環し遍在する仏性の流れと考えるとよい。環流に他ならない。

人体は水素、酸素、炭素、窒素そしてリンや硫黄など合わせた二九種類の元素から成るといふ。他の動物も似たような元素から成っているだろう。人間を含む動物は死ねばそういう元素に還元

され、自然に戻るのである。そしてそこから再び生まれ出て、見える形でこの世に現れる。無機の世界から有機の世界へ、そして再び無機の世界に帰り、再び有機体に結実する。壮大な循環ではあるまいか。壮大な環流ではあるまいか。地球はこの繰り返しを三七億年にわたって続けてきた。有機の世界にいる時間は長いものでも百数十年、短いものならば数日という、いずれにしても一瞬でしかない。無機の世界にいるときの方が長いのもかもしれない。しかし有機の世界と無機の世界は相互に交流しているのであって別の世界ではない。人間もあらゆる生物もあらゆる無生物もすべて同じ世界に属するものに他ならない。同じ根から出て、一瞬の間、違った形をとるものの、再び同じ根に帰る。同じ世界の仲間である。ボロブドゥールは私にそう考えさせる。

有機の世界にあるとき、それは、仏教が教えるように、苦難に満ちた苦の世界あるいは「迷いの世界」だろう。しかしそれを生き終えた後の無機の世界は苦がない世界である。感覚がないのだから苦を感じるはずはない。もちろん喜びや楽もない。ということとは苦からも楽からも自由な世界ということになろう。それこそが涅槃の世界ではないのか。

このような解釈は、一見したところ、ボロブドゥールの設計者が抱いた思いから外れているように見える。しかし人間というも

のが六大すなわち地水火風空識から成るといふ仏教思想に大方は沿っているのである。唯一、識を認めないところに違いがあるが、私は、識の代わりにDNAを考えたらいと考える。DNAが諸元素をまとめ上げて生体を造るのだから。釈迦が識にまつる役割を考えたときまだDNAは知られていなかったが、今、私たちはそれを知っている。もちろんDNAが解読されたからといってその本質が明らかになっただけでは全くない。依然として謎だらけである。そもそもDNAがなぜ存在するのかについてもはっきりしたことは判っていない。きわめて複雑で微細なその働きを見るにつけ、驚異としかいいようがない。いずれにせよ、この謎の物質がかくも多様な生物を生み、変化（普通には進化という）させてきた。これからもその営みは生物がこの地球上に存在する限り続くはずである。

人間とは人間のDNAが組織した水素や酸素の合成物に他ならない。他の動物と違うのはDNAの組成だけである。五〇〇万年前に人類はチンパンジーやボノボと枝分かれしたと言われている。確かに、彼らは人類に非常に似ている。類人猿と呼ばれる通りである。特に子供の身になって遊んでやる大人や仲間の安全に最大限の気配りを見せる「平和主義者」のボノボの生態を見てみると人間と見まがってしまう。むしろ人間の方が愚かであり、野

蛮とさえ感じるのは私一人ではあるまい。

それにしても、なぜチンパンジーやボノボや人類という生物が生まれたのであろうか。驚きである。人間とチンパンジーとボノボのDNAはほとんど同じである。人間とチンパンジーとボノボがほとんど同じ生き物だとするならば、チンパンジーやボノボも人間の死後と同じように、天国（極楽）や地獄などがあるということにならないとおかしい。否、すべての生物にないとおかしい。だがそう考える人はいなかったし、墓地に埋葬されるペットを持たない人以外には、今もない。ということは、人間を含むすべての生き物に天国も地獄もないと考えたほうが理屈に合うのではないか。死後の世界は人間の想像に過ぎないと考えたほうが判りやすいのではないか。そうした想像を膨らませるのも、人間が希望をもつ生き物であり、不安を抱える生き物ならば当然のことだろう。人間はすべてに拡大する生き物であり、そこに面白さもあり、悲劇も起こると考える⁵⁾。

仏教がもつ人間中心主義批判そして人間の愚かさや哀れを知る

私は畜生道という人間中心主義的な仏教の教えに強い違和感を覚えている。六道のうち、地獄道、餓鬼道、阿修羅道、天道の四道は人間の想像の産物だから現実には存在しない。しかし畜生道

と人間道は現実に存在する。先に紹介したように、「外面はどんなに素晴らしい姿をしていても、内部は山ほど汚いものを包み込んでいる」（源信…一一二）とか、「生まれた瞬間からずっと苦しみを受け続けている」（源信…一一四―一二五）とか、「たとえ生きしたところで最後には死んでゆく」（源信…一一八）という人間の姿はその通りだと認めたとしても、動物たちを「お互いに傷つけ、殺し合っているのです。飲んだり食べたりする場合も、少しも心が休まず、一日じゅう怖れを抱いています。……いつも食べることだけを考えていて、ほかのことは全くわかりません」（源信…九九）とする動物観は人間を中心に考えた動物観に他ならない。私はこういう動物観に違和感を持つ。「お互いに傷つけ、殺し合っている」のが動物ならばとうの昔に絶滅していたはずである。確かに、仲間同士の諍いはあるだろう。しかし殺し合うことはない。好んで自ら絶滅の道を選択するのは自然の掟に背くのだから、そのような動物はいないはずである。ただ一人、人間だけがそうする例外だといってよい。

確かに、動物が動物を食うという現象はある。肉食動物が草食動物を食う。それは、肉食動物は草食でできず草食動物を食う以外に生きる道はないからであり、自然の掟に従っただけである。草食動物が草を食うのと同じである。人間は雑食動物だから草食だ

けでなく肉食もしなければ生体を維持できない。したがって肉食を禁じる仏教は自然の掟に背くことになる。本稿では仏教が禁じる掟を扱ってきたが、ここで敢えて私見を付け加えておこう。肉食を禁じるのは人間の本来の生き方に反すると。魚や鳥や哺乳動物を食うことを禁じるのは人道に反すると。

肉食動物が草食動物を襲い、食うのは自然の掟である。また、肉食動物同士が「お互いに傷つけ、殺し合っている」という例は、あつたとしても、日常的に起こることではないだろう。むしろ人間の姿を投影した偏見と見てよい。

「飲んだり、食べたりする場合も、少しも心が休まず、一日じゅう怖れを抱いている」とか、「いつも食べることだけを考えていて、ほかのことは全くわかりません」といった動物観は、例えば庭先に降りてきた鳥たちの、絶えず警戒を怠らない姿を見ているとその通りだと思うが、人間と同じような思考能力をもたない鳥たちがなぜ心を休める必要があるのだろうか。むしろ何も考えずに、瞬間、瞬間を生きるだけで立派に生きていると私は思う。彼らに人間と同じ能力がないからといって蔑むのは不当だろう。動物には動物の生き方があり、それが全うされている限り「幸福」だろうし、人間には人間の生き方があり、それが全うされている限り「幸福」ということである。動物には人間と同じ生き方

が出来ないし、人間にも動物と同じ生き方はできないのである。

むしろなまじ思考能力をもってしまったためにあれやこれや考え、心配し、疑心暗鬼となり、悩んでしまう人間のほうが不幸ではないか、とさえ思う。もちろん思考能力があるから文化（広義）や文明を構築できたのだし、（一見したところ）成功裏に生き延びているのであるから、その限りでは思考能力は「利器」として働いたことは否めない。しかし思考能力があるばかりに悩みや心配を解こうと（ユダヤ教やキリスト教などは）天国や地獄を考え出し、仏教は六道や涅槃を考えなければ、生きていけないという事態を招いてしまった。このことも認めなければならぬ。自教が教える来世観に忠実に、盲目的に従うジハードなどという暴力行為を引き起こしているのを目の当たりにしたとき、人間が思考能力をもってしまった不幸を考えざるを得なくなる。ジハードが自他に対する暴力行為であり、愚行であることは、客観的に見れば、明らかである。

源信は動物を畜生と呼び、哀れむべき生き物と見なした。確かに、生命史上、絶滅した動物もいるし、絶滅に瀕している動物もいる。しかし彼らを絶滅させたり、絶滅の危機に追いやっているのはむしろ人間ではないか。問われるべきは人間ではないか。源信は人間の汚れている姿、苦しみの姿、そして無常の姿を示した

が、破壊する姿は示していない。源信が生きていた時代ですら人々は破壊に明け暮れていた。その後もあとを絶たない。今日の人類の所業を見るにつけ、破壊の主である人間をもっと強く明示してよいはずである。破壊は自業自得の行為であり、善因善果・悪因悪果という仏教の教えからも強く糾弾されなければならないはずである。自然破壊は悪因であり、悪果である。

すでに紹介したように、源信らの地獄思想が多くの日本人を、良かれ悪しかれ、導いてきた。日本にはジハードのような思想はないが、ひたすら極楽浄土への往生を願って日々を過ごし、六道めぐりを恐れて日々を過ごす人たちをたくさん生んだ。国民の誰もがイスラム、プロテスタント、カトリック、ヒンドゥー教、仏教などのいずれかをもつインドネシアでは天国行きを願い、地獄行きを恐れる心情は強い。しかし私はかつて、そうしたインドネシアにあって「地獄と聞いて怖がる人がいる。あるかどうか判らないのに」(Someya 2001: 8)と言ったある農民の言葉を聞いて深く印象付けられた経験がある。この人は、ジャワの伝統思想とヒンドゥー・仏教的思想やイスラム思想そして近代西洋思想を取り入れたジャワ心学 (kawruh jawa)⁽⁶⁾の信奉者だった。地獄を「あるかどうか判らないのに」と懐疑的に見る見方は日本では常識だろうが、イスラムなどの既成宗教が全国を覆っているインド

ネシアでは大変勇気のいる言葉ではないかと思う。私は彼を確かな思想の持ち主として高く評価した。今のインドネシアには彼のような精神が必要だと考えるからである。

結論

「隠された基壇」の地獄や天界の絵を見たとき、また、「隠された基壇」に描かれた民衆の絵から上段のジャータカ、アヴァダーナ、ラリタヴィスタラ、ガンダヴェューハに至る絵を見たとき、また、欄楯の上に鎮座する諸仏や円壇の釈迦像を見て最上階の大ストゥーパを見たとき、そしてそれら全体を総合的に見たとき、私たちは、至るところに「環流」を見出すのである。ボロブドゥールは環流思想をとりまとめた寺院であると私は考える。

付記

本論は、二〇一二年三月二九日に行われた東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の「インドネシア在地文書研究プロジェクト」(代表・宮崎恒一教授)で発表した草稿がもとになっている。ここで研究プロジェクトの宮崎恒二氏、青山亨氏、深見純生氏、風間純子氏、菅原由美氏、Willem van der Molen氏ほか参加された諸氏に厚くお礼を申し上げる。

注

- (1) シャイレンドラ王国と同時代の古マタラム王国(サンジャヤ朝)の関係については、染谷二〇一を参照されたい。また、最近、ジョグジャカルタ市内北部に位置するコタバル(Kota Baru)地区にシャイレンドラ王国ではなかったかといわれる遺跡が発見されたという情報が伝えられている。コタバル地区はチョデ川の東側の小高い丘の上であり、植民地時代は放送局やオランダ人支配者が住む高級住宅街であった。
- (2) たとえば、千原 服部、生田、伊東、岩本、Miksic、Dumarçay、石澤などがある。
- (3) それについては、染谷二〇一aを参照されたい。
- (4) 刻字の詳細については染谷二〇一の五一―五四を参照されたい。
- (5) 人間というものが本質的にすべてにおいて拡大するということについては詳しくは拙稿二〇〇九を参照されたい。
- (6) ジャワ心学はジョグジャカルタのスルタンハムンク・プオノ七世の王子だったキ・アグン・スリヨムンタラム(Ki Ageng Suryomentaram)が確立した思想である。彼は一九二七年に「幸福学要講」(ilmu beja)を著わし、ジャワ社会に大きな影響を与えてきた。「幸福学要講」は後に「心学」(kawruh jiwa)と名が改められた。彼の本は何度も出版され(例えば、Ki Ageng Suryomentaram, *Falsafah Hidup Bahagia*, Grasindo, 2002など)、今日でもインドネシアの人々に大きな影響を与えている。詳しくは染谷一九九七、二〇〇一、二〇〇八ならびにマルバングン・ハルジョウイログを参照されたい。

参考文献

- Badi & Nurhadi Rangkuti, *Rahasia di Kaki Borobudur, The Hidden Foot of Borobudur*, Katalis, 1989
- 千原大五郎『インドネシア社寺建築史』日本放送出版協会、昭和五〇年(一九七五年)
- 深見純生「ジャワ初期王権」、池端他編『東南アジア史1』岩波書店、二〇〇一年
- 源信(花山勝友訳)『往生要集』徳間書店、昭和四七年(一九七二年)
- Hariani Santiko, *Karmawibhanga, Rahasia dari Jawa Kuno (Karmawibhanga, the Secrets of Ancient Java)*, Rudi Badi & Nurhadi Rangkuti, *Rahasia di Kaki Borobudur: The Hidden Foot of Borobudur*, Katalis, 1989)
- 服部英二「南海大乘仏教への道―ポロブドゥールとアンコール文明をめぐって」『比較文明研究』第二号、麗澤大学比較文明研究センター、一九九七年
- 速水脩『地獄と極楽』『往生要集』と貴族社会』吉川弘文館、一九九八年
- 生田滋「東南アジア群島部における国家の発展」石澤良昭・生田滋『世界の歴史13 東南アジアの伝統と発展』中央公論社、一九九八年
- 石澤良昭『東南アジア多文明世界の発見』講談社、二〇〇九年
- Dumarçay, J., *Borobudur*, Oxford University Press, 1994
- 石田瑞麿『日本人と地獄』春秋社、一九九八年
- 伊東昭司『インドネシア美術入門』雄山閣、一九八九年
- 伊東昭司『ポロブドゥール巡礼』田枝幹宏・伊東昭司『ポロブドゥール遺跡めぐり』新潮社、一九九二年
- 岩本裕『ポロブドゥールの仏教』『東洋学術研究』第二二卷第一号、昭和五七年(一九八二年)

- マルバンゲン・ハルジョウィロゴ (染谷・宮崎訳) 『ジャワ人の思考様式』めこん、一九九二年
- Miksic, J., Borobudur: Golden Tales of the Buddhas, Periplus, 1990
- 中村元他監修 『岩波仏教辞典』岩波書店、一九八九年
- Raffles, S., The History of Java, Oxford University Press, 1988
- 染谷臣道 『アルースとカサールー現代ジャワ文明の構造と動態』第一書房、一九九三年
- 染谷臣道 『ジャワにおける植民地主義と文化的抵抗—キ・アグン・スリ ヨムンタラムの思想と行動に見る』山下・山本編 『植民地主義と文化—人類学的パースペクティヴ』新曜社、一九九七年
- 染谷臣道 『日本文明の光と陰』『比較文明』二三号、比較文明学会、二〇一三頁、二〇〇七年 a
- 染谷臣道 『何のための文明、誰のための文明』『比較文明』一三三号、比較文明学会、一一一一—一二四頁、二〇〇七年 b
- 染谷臣道 『ジャワ心学の比較文明的考察』『比較文明研究』第二三三号、麗澤大学比較文明文化研究センター、二〇〇八年
- 染谷臣道 『人間、この拡大するもの』『比較文明研究』第一四号、麗澤大学比較文明文化研究センター、二〇〇九年
- 染谷臣道 『自立する文明にどう対処するか?—ポスト文明に向けて』『比較文明研究』第一五号、麗澤大学比較文明文化研究センター、四七—七九頁、二〇一〇年 a
- 染谷臣道 『文明もまた還流の道を』『比較文明』二六号、比較文明学会、七七—九三頁、二〇一〇年 b
- 染谷臣道 『隠された基壇』から見たボロブドゥール』『比較文明研究』第一六号、麗澤大学比較文明文化研究センター、二〇一一年 a
- 染谷臣道 『自然の、自然による、自然のための文明をめざして』『比較文明』二七号、比較文明学会、二一—二三頁、二〇一一年 b
- 染谷臣道 『日本語とインドネシア語に見る「神の視点」と「虫の視点」を併せもつ言語文化の大いなる可能性について』『比較文明研究』第一七号、麗澤大学比較文明文化研究センター、一一—二二頁、二〇一二年
- Someya Yoshimichi, How Did the People Get Happiness Through Learning the Philosophy of Ki Ageng Suryomentaram?, SOMEYA Yoshimichi ed. *Psychosomatic Responses to Modernization and Invention of Cultures in Insular Southeast Asia*, Shizuoka Faculty of Humanities and Social Sciences, Shizuoka University, 2001, pp. 1-17. (Grant-in-Aid for Scientific Research of Monbusho and Japanese Society for Promotion of Science, (Chief of the Research Team: SOMEYA Yoshimichi))